

解説

昭和初期における、参謀本部陸地測量部の業務とその技術の全貌を紹介した写真集である。当時の陸地測量部は職員約六百名を擁し、いわゆる内地と朝鮮の地形図は作成済みで、台湾と樺太の平野部について五万分一地形図の作成を進めており、それに先立つ基準点測量はより困難な地域に向かっていた。その成果である各種地図の出版は年間三百五十万枚に達していた。

この写真帖に掲載された写真は、陸地測量部の事業と技術の全貌をまとめたもので、測量・地図作成史における第一級の史料であろう。

写真帖の冒頭は、東京三宅坂の上で、あたりを威圧するように建つ陸地測量部本館（参謀本部旧館）の写真が始まる。

測量の基礎としての基線測量関係では、氷漬け測棹による比較基線の検定など、測量の精度確保にかけた意気込みがあらわれている。北海道の原生林における三十三メートルの高測標（觚標）や、台湾の山岳地帯での測量風景など、困難な現地作業の様子も盛りこまれている。

当時、写真測量の実用化のためにカールツァイス社（ドイツ）から輸入されていた一級図化機ステレオプラニグラフや、地形急峻な北アルプスでの地上写真測量に使われていた写真経緯儀も紹介されている。

時代の流れを背景として、急増しつつあった地形図印刷のために、女性を含む大勢の職員が机を並べている清絵作業室や銅版彫刻作業室。地形図原寸大のガラス湿板写真機（移動架台レール付き）が並んだ様は壮観である。庁舎の一角に参考室があつて、昔の測量機器などが整然と展示されているのは、以前の目黒庁舎でもその面影を見た記憶がある。

当時は、大部分の地図が一般販売されていた時代であり、地図払下事務室では、そろばん片手に、地図元売り会社の職員大勢で活況を呈している。なかに、今日にも続く会社名のハッピも見える。

ところでこの写真帖であるが、いかなる目的、背景のもとに作られたものか、『陸地測量部沿革誌』にも、その記述や、間接的にそれを伺わせるものはない。

奥付にある昭和七年は、世情騒然の年であった。前年の満洲事変に続いて、三月に満洲国建国。その直前には上海事変が始まって、爆弾三勇

士の軍国美談が世を風靡していた。五一五事件もこの年である。

軍においては、記念すべき「軍人勅諭五十周年記念」の年であり、陸地測量部としても、軍上層部などにその存在を知らしめる必要があったことは想像に難くない。さらに、奥付の「八月」に着目すれば、同月末には「陸軍特別大演習図」などが出版されている。十一月中旬には、大元帥陛下（天皇）の統監のもとで、特別大演習が奈良県大和平野で行われるが、それに先だつて、参謀総長が参内して大演習のこと等を奏上されるはずと思われるので、その際に、演習場の地図とあわせて、この写真帖も天覧の誉に浴したものである。当時としては、最高の榮譽であつた。

各写真の標題には英文が添えられている。敵性語として英語が排斥され始める少し前のことである。前述の大演習を観戦する各国駐在武官にも配付されたと考えれば、英文の必要性も頷ける。

昭和初期のこの時代、慢性的な不況の中での昭和恐慌の時代ではあつたが、「大衆文化」のことばとともに、観光旅行や登山が大衆のものとなつて地図の需要も急増していた。しかし、昭和十年代に入ると、日中戦争の激化とともに野戦測量隊が派遣されるなど、地図作成の対象は外邦地域に移つた。日常生活の中にも戦時色が強まり、やがて、地図の販売も規制され始めた。

それに至る少し前の、わずかな期間。各種地形図などの一般図に加えて、都市近郊図（集成図）のほか、登山のための山岳図やスキー場図、演習場図や各種の図式等まで一般販売されるなど、地図が一つの全盛期を迎えていた時代の所産であり、栄光の陸地測量部への誇りが感ぜられるような写真帖である。

長岡正利（財団法人日本地図センター）

本書は長岡正利所蔵（小林陽信氏旧蔵）本を複製したものである。

陸地測量部寫真帖 複製版

二〇〇八年十月十五日 発行

編集 財団法人 日本地図センター

発行 財団法人 日本地図センター

T 153-85226

東京都目黒区青葉台四一九一六

電話 03-3485-8125

印刷・製本 緑川地図印刷株式会社

写真調整 財団法人 日本地図センター 企画編集部

本書この複製版の全部又は一部を無断で複写複製することは、著作権法上の例外を除き、遠慮下さい。なお、同じ原本は、国立国会図書館等でも所蔵されています。